

ウナギ漁獲増期待

資源回復へ遠州灘沖に321匹放流

浜名湖で取れたウナギを放流し、資源回復につながる事業が21日、遠州灘沖であった。大きいもので体長60〜70センチに育ったウナギ計321匹（124・5キ）が海へ放たれた。

（荒木正親）



海へ放流されるウナギ＝遠州灘で（代表撮影）

ウナギの仲買人や漁協の組合員らで組織する「浜名湖発親うなぎ放流連絡会」が2013年から取り組む「ニホンウナギ資源回復プロジェクト」。会員ら20人

仲買人ら「連絡会」

が浜松市西区の舞阪漁港から2隻の漁船に乗り、沖合約3キロの地点で放流した。ウナギは日本から南へ約3千キロのマリアナ海溝付近で産卵する。生まれた稚魚のシラスウナギは、サケのように生まれた川に帰る本能はないが、海流に乗って日本近海に戻ってくると考えられている。

連絡会の加茂仙一郎会長（63）は「浜名湖でシラスウナギの漁獲高が増えれば価格が安定し、食卓に並ぶ機会も増える。自分たちの手で資源を循環させていきたい」と話した。

費用の一部はインターネッツ上のクラウドファンディングで募り、8〜9月に25人から73万円を集めた。年内にあと2回の放流を行う。